

## 一般論文

# 保育における音楽教育を通して育つ「聴く力」とは —乳幼児の聴力の発達に着目して—

"The Ability to Listen" Developed through Music Education in Nursing  
—Focusing on Infants' Development of Hearing—

萩原 千史

Chifumi OGIHARA

キーワード：乳幼児 保育 音楽教育 聴力

## 概要

乳幼児の音楽教育においては、心身の発達特性と音楽の持つ特性とを深く関わり合わせることで、教育効果を上げることができる。本稿では、まず音楽と結び付けて、乳幼児期の聴覚機能の発達について確認する。そして、音楽教育を通じて「聴く力」が高まることにより、乳幼児のどのような成長が育まれるかについて述べた。これにより、「豊かな感性」「協調性や社会性」「表現能力」「心身の健やかな成長」「言語能力」の5項目に効果があることがわかった。これらの能力の育成において、日本の音楽教育メソッドでは、どのような音楽活動や方法が実践されているのかを明示し、聴く力および発達段階に応じた音楽教育の重要性を明らかにした。さらに、聴く力の重要性を捉えた保育についても述べ、保育における音楽教育を通して「聴く力」を育成していくことの必要性に言及した。

## 1. はじめに

音楽教育界において、大きな影響をもたらしたJ.L.マーセルは「音楽は、人間生活に役立ってこそ、教育に取り入れる価値があるのです。」<sup>1)</sup>と述べている。人と音楽との出会いは、「聴く」ことから始まる。音楽が乳幼児の成長にとって必要であると言われているが、何をもってそのように考えられているのだろうか。音楽教育に携わる者として、様々な先行研究を基に、この点について明らかにし、乳幼児における音楽教育の価値を再確認したいと考える。

本稿では、主に「聴く力」に着目しながら、音楽によって乳幼児期に育まれる能力について、考察していく。乳幼児の聴覚の発達、乳幼児の成長における聴く力の果たす役割、日本の音楽教育メ

ソッド、聴く力の重要性を捉えた保育の4つの観点から論ずる。

## 2. 乳幼児期における聴覚の発達と聴く力

乳幼児期における聴覚の発達については、これまで多くの研究がなされている。本稿においては音楽教育の観点から「聴く力」に着目して論ずるため、乳幼児の聴覚の発達に関しても音楽と聴覚の見地から述べていきたい。

### (1) 母親の声によく反応する胎児期の聴覚

人の五感の中でも聴覚の発達は最も早く、「胎児の聴覚は受精7か月頃にはその機能が完成する」(小西行郎他)<sup>2)</sup>と言われている。胎生7ヶ月頃からの胎児には、おもに3種類の音が聞こえるという所論がある<sup>3)</sup>。1つ目は母親の体が生み出す音

(母親の心拍音や血流音など)、2つ目は空気中を伝わる外界の音(生活音や母親の周囲の人の声など)、3つ目は母親の声であり、この3つの中で母親の声が最もよく聞こえており、とても敏感に反応するという。母親と他の女性の声を胎児に聴かせる研究<sup>4)</sup>の中では、母親の声を聴いたときの胎児の心拍数が知らない女性の声を聴いた時よりも上がり、胎児の口を動かす回数についても同様に、母親の声を聴かせた回数の方が増えているという結果がある。つまり、新生児の聴覚は生まれてくるまでの少なくとも約3か月前から機能が働き始め、空気中を伝わってではなく、流体を通じてさまざまな音を聴いており、特に母親の声に反応しているのである。

#### (2) 誕生から6ヶ月間の聴覚の急速な発達

小西らによると、次の3点において、聴覚の発達が著しいとされる。第一に、中耳洞が大きくなって音が伝わりやすくなり、大人より少し(10dB)音を大きくすることで十分に音が伝わっている。第二に、純音の周波数を識別する能力の検査では、大人と変わらないくらい正確に周波数の違いに反応できる。第三に、内耳が音の強さを測る性能も、新生児の段階で大人と変わらない。<sup>5)</sup> このことから、胎児期には聴くための基盤がほぼつくられており、生まれて間もなくからさらに急速に発達していく。そして、半年後には聴覚機能のほとんどが働いていると考えられる。

#### (3) 日常生活環境における乳幼児の聴く力

前述のように、乳幼児の聴覚は母親の胎内にいる時から発達し、生後6か月頃に成人の聴力にほぼ近い状態まで発達している。これについては、一種類の音の波でできた純音を聴いた場合に、周波数(音の高さ)の違い、音の強さを大人と変わらないくらいに反応できるという調査結果<sup>2)</sup>がある。

しかし、これが日常生活環境となると、大人と乳幼児の場合には、聴く力に大きな差が出てくる。これに関して論及されているものには、雑音が入る環境において、大人は必要な音を選んで聴き取れるのに対し、乳幼児は聴こえるすべての音を聴き取っており、自分に必要な音や声だけを拾って聴く能力はまだ備わっていないとされている。また、約6か月の間に、音の高さや強さを識別す

るのに必要な機能の基礎が整っていることも述べられている。<sup>2)</sup> つまり、今後、これらの機能を十分に働かせるには、もうしばらく月日と時間を要するのである。

#### (4) 赤ちゃんが、歌に惹きつけられる理由

前述の通り、胎児期には母親の声に特に反応するが、母親の声の中でも「お話」と「歌」とではどちらの方が赤ちゃんの注意をより強く引くことができるのだろうか。生後6か月の赤ちゃん43人を対象として行われた実験では、注視時間や集中時間は「お話」よりも「歌」のほうが長く、より赤ちゃんの注意を引いたことが確認されている。歌の方が赤ちゃんの注意を引く要因は、周波数の変化によって調査された。歌の時には、周波数が高くなったり低くなったりして、変化に富んでいる。これは、歌がマザリーズと言われる赤ちゃんへの話し方によく似ているからだと推測されている。<sup>6)</sup> また、母親が歌う子守唄の研究も興味深い。日本の子守唄17曲と外国各地で広く歌われている子守唄19曲を集めて楽譜を分析した研究では、440Hzの「ラ」の音が最も多く、次いで「ソ」の音が多く使われているという結果<sup>7)</sup>がある。この音は胎内でもよく聴こえる周波数の声<sup>8)</sup>であることから、胎児にとって聴きやすい音だと考えられる。さらに、440Hzは男性の裏声と女性のやや高い声の周波数<sup>9)</sup>に含まれており、このことから赤ちゃんには少し高めの声で語り掛けたり歌ったりしていることもわかる。

### 3. 乳幼児の成長における聴く力の果たす役割

聴く力が高まることにより、乳幼児の成長にどのような影響があるのだろうか。これまでの様々な研究から、次の5つの成長において役立てられると考える。

#### (1) 豊かな感受性を育む

聴く力が高まることによって、幼児の音に対する感受性は大きく向上すると考える。現在、私たちの耳に届く音の世界には、交通機関の騒音、生活に必要なものの電子音など、機械的に刺激的な音が溢れている。現代社会の様々な技術の発達により、鳥のさえずりや虫の声、風が木々を揺らす音、雨の音、波の音、季節特有の音など、子ども

たちの感受性に働きかけるような自然界の発する音を聴く機会が少なくなっているように感じる。このような音は「耳をそばだてて聴く」という行為から聴こえてくるものが多い。この行為は、音の高さやリズムを聴き分けるというよりも、音の持つニュアンスを感じ取ろうとする聴き方にあたる。乳児が、母親の発する声の抑揚を聴き取って、そのニュアンスを感じ取り、泣き止んだり喜んだりして反応することも「聴く力」の一例である。音楽の一つ一つの音にも必ずニュアンスがあり、何らかのイメージを受け取ることができるのは、大人だけではない。前述の通り、生後6か月頃には既に、音の高さや強さ、変化などを識別するための基本的な仕組みができ、それらが働き始める。<sup>2)</sup> このことからわかるように、乳幼児でもその年齢なりの音の感受があり、その積み重ねによって感受性が鍛えられていく。これを積み重ねるにあたり重要なのは、日頃どのような環境で、どのような音を、どのような場面で耳にしているかである。その重要性については、他の項目で改めて述べるが、要するに、その成長をいかに伸ばすことができるかは、その後の音や音楽との関わり方にかかっているのである。

## (2) 協調性や社会性を養う

J.L.マーセルの音楽教育観について述べられている研究<sup>10)</sup>の中で、彼が音楽の演奏は2つの意味で社会的行為であることを指摘したとされている。一つは、音楽の演奏を音による発言とするなら聴取者は欠くことのできない存在であるという点において、演奏者と聴取者との間に社会性が生じるものであること。もう一つは、音楽の演奏形式で最も特色のあるものはアンサンブルであるという点において、演奏者間においても社会性が生じることにについてである。

音楽は、一人で楽しむだけでなく、グループや集団でその体験を共有できるものである。グループや集団で演奏したり、お互いの演奏を聴きあったりすることを通して、幼児は音楽の持つニュアンスや感情をリアルタイムで味わいながら、自分なりに感受する。このことが人との繋がりを深めていき、その過程において協調心を養っていく。また、マーセルは「音楽が人間の生活に大きな影響を及ぼしてきたのは、音楽の持つこの社会的関

連性のためである」<sup>10)</sup>ことも述べているとされる。音楽は、人格形成を図るための優れたコミュニケーション方法の一つである。誰かと一緒に音楽活動を行うことで、幼児は他者との関わりを意識し始める。そして、他者との違いに気づき、自分はこうしたいという思いが芽生える機会にもなる。他者と共に音楽活動をする経験を通して、社会性を培うことは重要である。

## (3) 表現能力を育む

乳幼児における表現は、日常生活の何気ない場面で見ることができる。子どもたちの遊びの中には、歌を用いながら遊ぶことも多い。例えば、「だるまさん、だるまさん、にらめっこしましょ、わらうとまけよ、アップンブン」と歌いながら、自ら表情を作り相手を笑わすにらめっこのわらべうたがある。だるまさんと呼びかける言葉のリズムが2回繰り返されることで、子どもたちは徐々に遊びに惹き込まれていく。そして、「アップンブン」という言葉を合図ににらめっこを始める。これは、子どもが自ら歌と遊びを掛け合わせて楽しむ音楽表現の芽生えと捉えることができる。また、幼児期に歌われることもある「いちばんぼしみつけた」は、長2度の音程の行き来から成るわらべうたであるが、話し言葉から歌へとつなげていくことで、言葉を話すことそのものも遊びとしてとらえ楽しむことができる。音楽的な表現の芽生え<sup>11)</sup>と言える。

幼児期になると、身体機能の発達に伴い、様々な音楽活動を行うことが可能になり、表現力の幅が広がっていく。これに関連して、「音楽作品の完成した姿を大人の視点でイメージし、それを演奏できるように子どもたちの音楽技術を近づけること（上手に歌を歌ったり、楽器を演奏したり、踊ったりすること）を子どもの音楽性を育むことと考えている人もいる」<sup>12)</sup> ことについて述べられている。例えば、歌唱において、発声器官の未発達な幼児期に求められるのは、歌うことを感覚的に経験させていくことであって、高い歌唱力ではないことは明らかである。もちろん演奏の完成度を高めること自体は素晴らしいことだが、幼児期の子どもたちに大切なのは、もっと他にある。

また、子どもたちの表現能力を育むためには、「保育者が設定する音楽活動以外の何気ない日常

生活のなかでの音楽行動をみる必要がある」<sup>12)</sup>といわれている。遊びの中で自然に歌う作り歌やいつも友だちと歌う好きな歌、手あそびや踊りなどの活動を大切に、友だちと合わせた時の音の重なりや美しさや心地よさといった音楽そのものの持つ魅力や不思議さ等の多くの体験を積み重ねていくことが、幼児の表現能力を育むことにつながる。

また、本物の音楽に触れることも、表現力を高めるために、大変効果的である。世の中には音楽を聴くためのあらゆる媒体が存在する。聴きたい音楽がいつでもどこでも様々な媒体を通して聴くことができ、それは手軽で簡単な方法である。しかし、生の演奏で聴く音楽と媒体を通して聴く音楽とでは、聴く側に伝わる音楽の印象が大きく異なる。なぜなら、生の演奏においては、演奏する保育者の姿を間近に見ることができ、その表情の変化や息継ぎからも、演奏者の思いや心境が直に伝わってくる。さらに、演奏者が複数であれば、互いに間合いを取って呼吸などを合わせている様子を見ることができ、聴く側の集中力も高まる。そして、生の音楽を仲間と聴くことによって、より音楽の持つ美しさや迫力を感じ取り、感動を共有することもできる。他にも、会場全体の響きに包み込まれて音楽を聴くことは大変心地良い音楽体験となる。生で本物の音楽を聴く機会は限られるかもしれないが、これに触れる機会を持つことは、表現力を高める上で大切な音楽経験の一つになると考える。

#### (4) 心身の健やかな成長を促す

音楽は、乳幼児の心身の健やかな成長に欠かすことのできない重要な役割を担っている。シュタイナーの幼児期の音楽教育についての研究<sup>13)</sup>では、子どもは幼いときからイメージ豊かな世界のなかでゆっくりと過ごしながらか、少しずつ覚醒して大人になることが望ましい。そうしてはじめて精神的なものが獲得されることやシュタイナーが幼児期の子どものには芸術教育の必要性を示したこと等が述べられている。このことから、芸術教育の一つである音楽教育は、乳幼児の生活に欠かせないものであり、心身の健やかな成長を促すことができる。さらに、幼児はグループや集団の中で音楽活動を行うことによって、自らの存在を実感し、

安心感を得ることもできる。自分と友だちとの違いを感じ取ったり、お互いの良さや可能性を見つけたりする過程で、自分に自信を持つことができる。音楽活動において、この経験を繰り返すことで、幼児は大勢の中にあっても安定した心の状態を保つことができると考えられる。

乳幼児に見られるリズムと運動の関係を重視される研究が多く見られる。E.J.ダルクローズによるリトミックについて、「音楽において、生活と密接に結びつき、感覚に訴える要素はリズムにあることを見出した」<sup>14)</sup>という指摘がある。また、シュタイナーも3・4歳の子どもの身体にリズムが必要とされていることについての考えを述べている。<sup>15)</sup> このことから、子どもにとってリズムに触れることやリズムを伴う身体表現は、身近なことであることがわかる。いろいろなリズムに反応し、リズムに合わせて手拍子やステップを踏むなど、リズムを伴う様々な活動を繰り返し、子どもたちは心身ともに健康に成長していけると考える。

#### (5) 言語能力が高まる

音楽と言語の習得には共通点があり、密接に関係している。ルチアーノ・ベリオは、「私たちは、声というものを、ふたつのレベルで聴いています。ひとつは音響的なレベルで、もうひとつは意味のレベルです。そして、普通私たちが『言葉』として声を聞いている場合、音響的なレベルと意味のレベルの間には相互作用があり、一方がもう一方に意味を与えているわけです。」<sup>16)</sup>と述べている。確かに、歌を聴くという一つの行為において、詩の意味を理解するために、詩そのものだけでなく、歌い手の声色の変化や響き、言葉の抑揚や強弱、アゴーギク等と合わせて、音楽を聴き取り感じ取っている。例えば、中学校の鑑賞教材、シューベルト作曲の歌曲「魔王」は歌詞がドイツ語であるため、生徒が歌詞から意味を理解することは難しい。しかし、歌い手やピアニストの演奏表現の豊かさから、父親と子どもの会話の意味などは理解しやすくなっている。これは、声の調子やイントネーションでメッセージが伝わるプロソディの効果<sup>16)</sup>といえる。また、幼児は替え歌が得意であり、日常的に歌詞を変えて遊ぶことがよくある。さらに、言葉に高低をつけて覚えやすくする方法は大人でもよく用いる。つまり、歌にのせることで言葉の



意味が理解しやすくなり、コミュニケーションが取りやすくなると考えられる。それを応用して、失語症の大人に対し、わざと大きな抑揚をつけ歌を歌うようにして声を出す練習で、次第に言葉が話せるようになる<sup>17)</sup>という実践が行われている。この実践から、音楽と言葉には密接な関わりがあり、聴くということの重要性も明らかである。

#### 4. 適期教育を実践する国内の音楽教育メソッド

ここまで「聴く力」を育てることが子どもの成長にとっていかに大切かということについて論じてきた。前述の通り、聴力は他の発達に比べ、胎児期の頃から高い能力が備わっている。また、生後間もなくからさらに著しく発達するため、早い段階から様々な成長に役立てることができる能力であるといえる。この聴感覚の発達は、音楽表現に必要な身体機能の発達特性との差をふまえて上手く活用できれば、子どもの成長過程に大きく貢献できる力となる。この聴く力についての重要性を理解し、聴く力によって育まれる先に述べた様々な成長を、発達段階に応じた音楽教育で行っている日本の音楽教育メソッドがある。それがヤマハ音楽教育メソッドである。1990年に設立されたヤマハ音楽教育研究所<sup>18)</sup>では、60年以上の歳月を経たヤマハ音楽教室の現場経験や新しい科学的な見地から、音楽教育の研究者、音楽教育者、幼児教育研究者らと共に「ヤマハ音楽教育システム」という教育メソッドを開発した。この教育メソッドでは、総合音楽教育、適期教育、グルーブレッスンという3つの柱<sup>19)</sup>を基盤とした考え方の中、音楽教育を行っている。もちろん音楽教室での音楽教育を前提として考えられた研究であるため、保育の音楽教育とは異なり、音楽能力をいかに定着させられるかを高く求められる面もある。しかしながら、発達段階に応じた音楽教育を行っているということは、保育の音楽教育と通じるどころが多くある。先に示した5つの「子どもの成長における聴く力の果たす役割」において、このメソッドではそれらがどのように育まれているのかを鑑みながら、具体的に述べていきたい。

##### (1) 豊かな感受性を育む

音楽に関する豊かな感受性とは、何を指し、

どのように育つのだろうか。その一つに、些細な音の変化にも気づき反応できることを目指し、「聴く力」を高めることによって育つものだということが考えられる。そのためには、聴覚への刺激を通して脳を鍛え、音に対する集中力を養うことが必要である。作曲家の大島ミチルは、3歳からヤマハ音楽教室に通っており、「オルガンやエレクトーンなどを使い、自分がイメージしたものを音で表現することが、文字や絵で表す以上に面白くて仕方なかった」<sup>20)</sup>といい、さらに「ジャズ、ロック、ポピュラー、ラテン音楽と体に響くものは何でも採譜し、エレクトーンで弾いた」<sup>21)</sup>という。エレクトーンにはあらゆる楽器の音色や様々なリズムが組み込まれている。それを組み合わせることによって、オーケストラ曲などをそれぞれの楽器の音色を用いて一人で演奏することが可能である。ジャンルや編成にとらわれず、多様な音楽を生み出せる機能が充実している。それは、いろいろなジャンルの音楽と出会うことに繋がる。彼女の場合は、子どもの頃に様々なジャンルの音楽を聴いていたことがベースとなり、多くの人に愛される素晴らしい音楽をたくさん生み出している。

生後6か月の赤ちゃんに複雑なリズム(バルカン諸国のダンス曲に基づいたもの)を聴かせる実験が行われたが、生まれ育った地域に限らず、複雑なリズムの違いを区別できることが明らかとなった。赤ちゃんは世界中のどこで生まれても様々なことに適応できる能力を持っているのだろうと考えられる。<sup>22)</sup>したがって、乳幼児の誰もが音や音楽と関わり「聴く力」を高めることができ、豊かな感受性を育むことができるのである。限られたジャンルの音楽、限られた音楽活動に固執してしまいうのではなく、幅広い音楽に触れることが感受性を豊かにすることへ繋がる。よって、ヤマハが行っている様々な音楽を再現できる楽器の活用、そしてジャンルにとらわれない音楽経験、様々な項目を通して学べる総合音楽教育は、感受性を育てることの大事な教育内容であると考ええる。

##### (2) 協調性や社会性を養う

協調性や社会性は、ヤマハ音楽教育システムの3つの柱の一つである「グルーブレッスン」によって育むことができる。グループは、最少2人～最

大10人ぐらいまでで構成されている。グルーブレッスンでは、「子ども同士が遊びの延長として音楽を楽しみつつ、みんなで音楽を作り上げていく達成感を味わえる。」<sup>23)</sup> という良さがある。子どもは、家庭や保育所などで、家族や友だち、保育者などとの遊びや交流を通して、様々なものに触れ、体験することを繰り返す。その中で、多くのことを吸収し、身につけていく。これらの大半は覚えよう、学ぼうと思って身につけていくのではなく、自然に覚え、当たり前のことだったかのように出来るようになっていく。これらがグルーブレッスンの中では可能となる。また、その過程で「子供たちに他人に気遣いができる心を養い、社会性を育むという効果も狙った。」<sup>22)</sup> としている。グルーブの仲間と様々な音や音楽を聴いたり、歌ったり、弾いたりすることによって、多くの共有が生まれる。一緒に同じ音楽を聴き、様々な発見を分かち合うことができる。また、お互いの演奏を聴き合うことで、刺激し合い、切磋琢磨できる仲間にもなれる。さらに、声や音を合わせたり、ハーモニーを作り出したりすることの心地よさも感じられる。このように仲間と音楽の楽しさを共有することを通して、子どもたちは協調性や社会性を養っていく。

### (3) 表現能力を育む

音や音楽を聴くことと表現力についてはこれまでも多く研究されてきている。幼児期の音の聴取や表現力および好奇心に関する研究では<sup>24)</sup>、音を聴取し表現する力は、「心を動かす音との出会いやきっかけが大切であると考えられる。それは例えば本物の楽器の音色であったり、幼児が興味を抱いたり好奇心を持って耳を傾けたりする音であるだろう。」と述べられている。このことから、幼児期には、あらゆる音楽活動を通して、様々な音を聴き、興味のある音や音楽と出会うことで、のちに自己表現するための素質や素養づくりができると考えられる。

ヤマハ音楽教室で使用されている音源は、ロンドンフィルハーモニー管弦楽団やロイヤルフィルハーモニー管弦楽団の演奏で収録され<sup>25)</sup>、子どもたちがレッスンや家庭で何度も耳にするものには本物の音を取り入れることにこだわっている。保育士養成校の音楽教育についての研究<sup>26)</sup> では、

「乳幼児にとって、プロの演奏家による生演奏やCDを聴くことが必ずしも最良の方法とは言えない。」とも述べられている。日頃耳にする生の音楽といえば、母親や保育士による歌声や演奏となる。見ず知らずの人による演奏よりも身近な人の演奏であれば、より音楽に親しみや興味を持つことができる。高質の音楽、親しみや興味のある音楽、この両者が合わされば、さらに子どもの音楽に対する幅が広がり、イメージや表現の幅も広がっていくと考えられる。

また、テキストにおいては、子どもの成長に合わせてイラストや絵のタッチを微妙に変え、工夫が凝らされている。8～10年ぐらいでテキスト改訂が行われ、それまでの間に試作品を作り、子どもの反応を参考に、よりよいものへ作り上げていく。<sup>27)</sup> この年齢での様々な体験がこれからの子どもの表現の基となっていくことを考慮すると、どのような教材を用いて音楽活動が行われるのかということも子どもの成長において大変重要な要素の一つであると言える。テキストは子どもがその音楽に興味をもつための手助けとなる大事なツールであり、それが興味関心を惹き、イメージし易いものであることは必要不可欠である。

### (4) 心身の健やかな成長を促す

心身の安定は、健やかな成長にとって欠かすことのできないものである。そのためには、無理のない発達段階に適した音楽活動であることが重要である。

ヤマハのメソッドでは、3本の柱の一つに適期教育<sup>19)</sup>がある。ヤマハが最も長い年月をかけて研究し、現在のものに構築されたコースでありヤマハ音楽教室の要となる幼児科は、4～5歳児から始まりグループ制の2年一貫のコースである。<sup>28)</sup> 幼児科のレッスンは次のように行われている。総合的な音楽力を図るため、バランスよく様々な音楽体験ができるようにいくつかの学習項目がある。その中の一つにレパートリー（鍵盤曲）<sup>29)</sup>がある。このレパートリーが鍵盤を使い弾けるようになるまでの学習過程に注目する。幼児科では、レパートリー1曲を仕上げる順番が「きく→うたう→ひく→よむ」となっている。まず、先生の演奏やCDで曲を聴き、「歌いたい」「弾いてみたい」という気持ちを喚起する。次に、先生が歌ったり弾い

たりするのを聴き、それをまねして歌詞やドレミで歌う。その際に、曲の表情やニュアンスもまねして表現する。そして、歌いながら片手ずつから弾き始め、徐々に両手で1曲弾けるようにしていく。最後に、弾いた曲の楽譜をドレミで歌いながら指で追ったり、そのメロディーをマグネットで五線上に置いたりして音を確認める。聴いて歌って弾いたものを、最後に楽譜で確認していくことによって、少しずつ楽譜に対する興味づけを行う。<sup>29)</sup> このようにして無理なく楽しく、様々な音楽と向き合えるような手順に沿い、レッスンが進められる。一般のピアノ教室では、読譜から入り、読んだ音を鍵盤で弾くという順番で一曲を習得することが多い。しかし、個人差はあるものの、幼児期には読譜をするだけの脳や視覚は未発達である場合が多く、幼児にとって読譜は困難な場合が多々見受けられる。音楽教育者であれば、幼児期の無理な音楽活動によって受けた音楽に対するイメージが、大人になっても残っており、音楽を好きになれないというような話を耳にすることがあるだろう。この時期の音楽教育法はその子どもの一生を左右しかねないのだ。ヤマハの音楽教育では、幼児期には年齢に見合った読譜の方法を取り入れ、知的理解力が高まる児童期になってから、読譜力を育てる。<sup>29)</sup> これらを踏まえると、発達段階と活動内容の関係が一致してこそ、音楽活動を楽しむことができ、無理なく心身ともに健やかに成長できると考える。また、幼児科までの年齢のコースでは、保護者同伴のレッスンであることも特徴の一つである。<sup>30)</sup> 保護者が同席し、一緒に音楽活動を楽しむことによって、気持ちが安定している中で音楽体験ができる。これは、この時期の子どもの心理面において、大きな影響があると考えられる。

#### (5) 言語能力が高まる

聴覚と言語の習得には関連があるという研究が多くある。脳科学者の古屋によると「言葉の理解や表現を司る脳の部分である言語野（言語中枢）は音楽情報も処理しており、適期音楽教育を受けた子どもは言語野も鍛えられる。」<sup>31)</sup> とされる。また、乳幼児の音楽教育の中で「ヤマハは聴くことに特化したトレーニングをしているので、相手の感情の機微を読み取る能力も高まり、イントネーシ

ンやニュアンス、声の高低や言葉の響きなどで、相手の奥底の感情を読み取ることができる。」<sup>31)</sup> と語る。つまり、乳幼児の頃から音楽活動を通して、聴く力をつけていくことで、それを言語習得にも活かせるのである。

### 5. 「聴く力」の重要性を捉えた保育とは

ここまで発達段階に応じた音楽教育について、述べてきた。どの保育現場においても、「子どもの成長における聴く力の果たす役割」として必要な共通の内容について、以下に述べることとする。

#### (1) 保育現場における音環境への配慮

「乳幼児期における聴覚の発達と聴く力」の(3)項で、聴きたい音を選択して聴くことの難しい乳幼児の聴覚の特色について述べた。そこで、保育者には保育現場の音環境について配慮することが求められる。まず、乳幼児の耳に保育者の声や音が実際にどのように聞こえているのか、一人一人の聞こえの差異や聞こえに問題のある乳幼児はいないかを把握する。また、高い音が聞き取りやすく低い音が聞き取りにくいという聴覚の性質を理解した保育内容となっているか、保育者の語りかけが子どもにとって聴き取りやすいものとなっているか等にも配慮が必要である。「聴く」という視点から、乳幼児を取り巻く音環境を適切な状態になるよう見直すことは、保育の質の向上にとっても大切な内容である。

#### (2) 保育におけるユニバーサルデザインの音楽表現の重要性

文部科学省が2012年に実施した「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査によると、小学1年生で約9.8%の児童が支援を必要としている。」<sup>32)</sup> さらに「乳幼児期、家庭・保育所・幼稚園・認定子ども園などにおいても、約1割程度の子どもの同年齢の子どもと同じ活動ができない、集団適応に時間がかかっている」<sup>32)</sup> という推測もされている。このことから、保育現場において、どのような子でも楽しめるユニバーサルデザインの音楽活動が行われることが重要であることがわかる。発達障害の有無にかかわらず音楽活動を楽しむことで、子どもの様々な可能性を引き出せ

るかもしれない。例えば、保育の中で、言葉では言いたいことを上手く言い表せなくても、音楽の力を借りることで何か表現できる子がいるかもしれない。また、周囲の友達と同じようにできなかったことが、音楽に結び付けることでできるようになるかもしれない。一人一人と向き合い、大切に育てていくことを、音楽の持つ特性を活かして実現できたら、保育の可能性が広がることにも繋がっていくだろう。さらに、時代に適応した音楽教育を知り、それを教育の現場で実践できることも重要だと考える。

## 6. まとめ

マーセルは、「音楽の人間の価値は、音楽自体にあるのではなく、音楽に対する私たちの反応の仕方と、私たちが音楽をどう用いるかにあるのです。」<sup>1)</sup>と述べている。私たちが、音楽をどのように扱うかによって、その教育的価値が決まる。そして、乳幼児の音楽活動はその後の人間形成において大きな影響があり、その時期の保育に携わる保育者は、非常に大切な役割を担っていることが再確認できた。乳幼児の音楽教育において、心身の発達特性を正しく理解し、音楽の持つ特性と深く関わり合わせることで、初めて教育効果が上がると言える。それを実現させるためには、保育者が乳幼児の心身の発達を理解していること、発達段階に応じた音楽活動を吟味して保育内容を立てられること、それを実践する技術を持っていることが望ましい。この研究から、保育士養成校においての学びは非常に重要であることが再認識でき、これをふまえて、今後保育士養成校の音楽教育および乳幼児の音楽活動に携わっていきたい。また、保育における音楽教育も時代と共に変容する必要があり、現代に求められものを検討し、それを伝えていく大切さについても見つめ直すことができた。

### 〈引用・参考文献〉

- 1) J.L.マーセル『音楽教育と人間形成』音楽之友社, 10.(1998)
- 2) 小西行郎他『赤ちゃん学で理解する乳幼児の発達と保育第2巻 運動・遊び・音楽』中央法規,96.(2017)
- 3) 呉東進『赤ちゃんは何を聞いているの?』北大路書房, 22-24.(2009)
- 4) 同上24-25.
- 5) 小西行郎他『乳幼児の音楽表現』中央法規,9.(2016)
- 6) 『赤ちゃんは何を聞いているの?』3)16-18.
- 7) 同上36-37.
- 8) 同上10.
- 9) 同上5.
- 10) 山村慎他「「全体性」を体験する「場」としての音楽教育」『大阪教育大学紀要 第V部門 第53巻第2号』32.(2005)
- 11) 平田智久他『保育内容 表現』ミネルヴァ書房,99-103.(2010)
- 12) 同上105-106.
- 13) 馬場結子「ルドルフ・シュタイナーにおける子どもの音楽教育に関する一考察」『淑徳短期大学研究紀要第51号』62-74.(2012)
- 14) 加藤あやこ他「シュタイナー、ダルクローズ、コダーイ、オルフによる幼児期の音楽教育に関する考察」『エデュケア第37巻 大阪教育大学幼児教育学研究室』1.(2016)
- 15) 武満徹「歌の翼、言葉の杖—武満徹対談集 阪急コミュニケーションズ」(1993)
- 16) 『赤ちゃんは何を聞いているの?』3)72.
- 17) 同上77.
- 18) 吉井妙子『音楽は心と脳を育てていた』日経BP社, 159.(2015)
- 19) 同上23.
- 20) 同上46.
- 21) 同上50.
- 22) 『赤ちゃんは何を聞いているの?』3)56-58.
- 23) 『音楽は心と脳を育てていた』18)22.
- 24) 立本千寿子「幼児の音の聴取・表現力と行動特性-聴く・つくる活動を通してみる幼児像-」『教育実践学論集』(2010)
- 25) 『音楽は心と脳を育てていた』18)128.
- 26) 鈴木恵津子「保育士養成校における音楽教育の意義—子どもの心身の発達とかかわりをふまえて—」『鎌倉女子大学紀要第9号』111.(2002)
- 27) 『音楽は心と脳を育てていた』18)127-128.
- 28) 『音楽は心と脳を育てていた』18)21-27.
- 29) ヤマハ音楽教室公式ホームページより  
<http://www.yamaha-ongaku.com/music-school/>
- 30) 『音楽は心と脳を育てていた』18)12.



- 
- 31) 『音楽は心と脳を育てていた』18)140.
- 32) 星山麻木他『一人一人を大切にするユニバーサル  
デザインの音楽表現』萌文書林,44.(2015)

